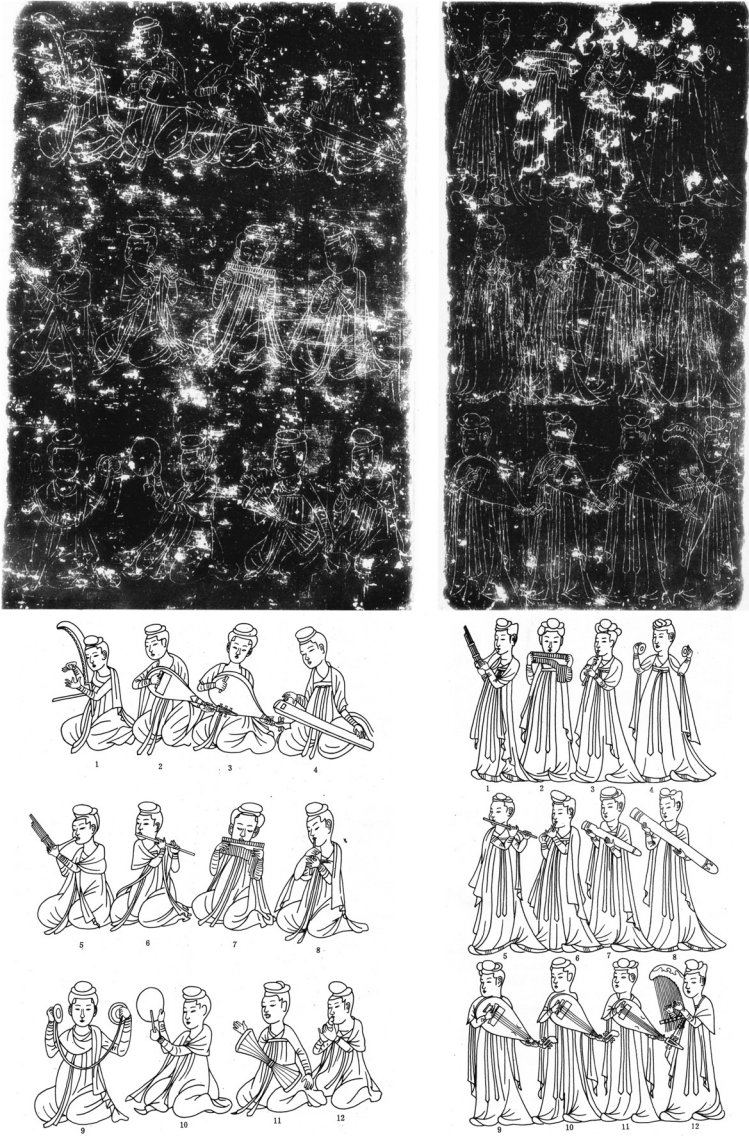


図18 李寿墓（577～630年）石槨線刻画の楽舞図



【出典】 西安碑林博物館。1973年陝西省咸陽市三原縣李寿墓（唐高祖李淵獻陵陪葬墓）発掘。孫機「唐李寿石槨線刻《侍女図》、《楽舞図》散記（下）」『文物』1996年第6期、57-58頁図。

一般化することはなかった。中国では、仏教という外部から将来された世界宗教圏に包み込まれた一方で、儒教や道教等にもとづく古来の死生観は色濃く維持されていたといえよう。

ただ、個人救済を目的とする仏教の浸透によって個人意識が一段と進展したことは確かであり、八世紀以後に顕著となる世俗化の進展を促進した点において、この時代の特色を見いだすことができよう。貴族邸宅での娯楽生活を描く墓の壁画や線刻は、宗教色は少なく、あくまで世俗化の進展を示す指標である。墓葬の変遷を手がかりに眺めてみても、長安の都市生活は、八世紀以後、一段と洗練されて充実していき、長安は、多くの異なる階層や出身の人々の集う巨大な世俗都市へと変貌していくのである。

※本稿は、二〇一六年八月二六日（金）に韓国の忠南大学で開催されたシンポジウム「동아시아古代都城과 墓域（東アジア古代都城と墓域）」での報告「隋唐長安と葬地―生前の生活空間と死後の世界―」（報告要旨は、予稿集『동아시아古代都城과 墓域』一三二―一四六頁に掲載）を、当日のソウル大学の金秉駿先生の討議や、忠南大学の朴淳發先生、滋賀県立大学の田中俊明先生、陝西省考古研究院の張建林先生、中国社会科学院考古研究所の劉振東先生、南京大学の張学鋒先生等の助言をふまえて全面的に増訂したものである。ご教示に対して、ここに深謝申しあげます。

註

- (1) 内堀基光・山下晋司『死の人類学』（東京・講談社、二〇〇六年）二二一―四九頁。
- (2) フィリップ・アリエス著、成瀬駒男訳『死を前にした人間』（東京・みすず書房、一九九〇年、原書 *L'homme devant la mort*, Paris: Éditions du Seuil, 1977）同、福井憲彦訳『図説死の文化史―ひとは死をどうのまへに生きたか』（東京・日本エディタースクール出版部、一九九〇年、原書 *Images de l'homme devant la mort*, Paris: Éditions du Seuil, 1983）同、伊藤晃・成瀬駒男共訳『死と歴史―西欧中世から現代へ』（東京・みすず書房、二〇〇六年、原書 *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours*, Paris: Éditions du Seuil, 1975）。
- (3) 福井憲彦「死という鏡に写された歴史―歴史における死への問い―」（『現代思想』一九八四年九月号）一四二―一五〇頁、阿部謹也「死者の社会史―中世ヨーロッパにおける死生観の転換―」（『阿部謹也著作集2』東京・筑摩書房、二〇〇〇年、初出一九八四年）一八三―二三七頁、ミッセル・ヴォヴァル、富樫璽子訳『死の歴史―死はどのように受け入れられてきたのか―』（東京・創元社、一九九六年、原書 *Michel Tovellet, L'heure du grand passage: Chronique de la mort*, Paris: Calmann, 1993）一〇七―一五頁などを参照。また、ジョン・マクマナース著、小西嘉幸ほか訳『死と啓蒙―十八世紀フランスにおける死生観の変遷』（東京・生前の空間、死後の世界（妹尾）
- (4) 平凡社、一九八九年、原書 John McManners, *Death and the Enlightenment: Changing Attitudes to Death among Christians and Unbelievers in Eighteenth-Century France*, Oxford: Oxford University Press, 1981）パトリック・ギアリ著、杉崎泰一郎訳『死者と生きる中世―ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷』東京・白水社、一九九九年、原書 Patrick Geary, *Living with the Dead in the Middle Ages*, Ithaca: Cornell University Press, 1994）とノルベルト・オラー著、一條麻美子訳『中世の死―生と死の境界から死後の世界まで―』（東京・法政大学出版局、二〇〇五年、原書 *Norbert Ohler, Sterben und Tod im Mittelalter*, Zürich: München: Artemis Verlag, 1990）は、エリアスとは異なる視角から、西欧における死生観の変遷を論じている。
- (5) 内堀基光・山下晋司、注1『死の人類学』三二―三八頁。
- (6) 仏教の浸透が、中国の伝統的な喪葬思想や喪葬形式に与えた影響については、エリック・チュルヒャー著、田中純男・成瀬良徳・渡会顕・田中文雄訳『仏教の中国伝来』（東京・せりか書房、一九九五年、原書 *Erick Zürcher, The Buddhist Conquest of China: The Spread and Adaptation of Buddhism in Early Medieval China*, Leiden, E. J. Brill, 1959）を始め、多くの優れた研究がある。
- (7) M・エリアスは、人類における魂の不死という観念の普遍的存在を指摘し、その考えの根底には、生と死と再生という宇宙リズムの周期的更新という考えがあるとする

- (M・エリアーデ著、荒木美智雄・中村恭子・松村一男訳『世界宗教史Ⅰ 石器時代からエレウシスの密儀まで』東京・筑摩書房、一九九一年、四四―四五頁、原書 *Mitcea Eliade, De l'âge de la pierre aux mystères d'Eleusis*, Paris: Payot, 1976)。ただし、霊と肉の定義は「まるまで」であり、魂は複数あると考える民族も多い。中国漢族の場合は、霊魂は魂と魄という二種類に分類できるとする文化をもつ。
- (7) 中国古来の霊肉二元論については、康韻梅『中国古代死亡観の探求』(台北・国立台湾大学出版委員会、一九九四年)、蒲慕州『墓葬与生死—中國古代宗教之省思—』(台北・聯經出版事業公司、一九九三年)、大形徹『魂のありか—中国古代の靈魂観』(東京・角川書店、二〇〇〇年)、伊藤清司『死者の棲む樂園—古代中国の死生観』(東京・角川書店、一九九八年)、吉川忠夫『中国古代人の夢と死』(東京・平凡社、一九八五年)、同『古代中国人の不死幻想』(東京・東方書店、一九九五年)、西岡弘『中国古代の葬礼と文学』(東京・汲古書院、二〇〇二年)、盧建榮『北魏唐宋死亡文化史』(台北・麦田出版、二〇〇六年)等を参照。
- (8) 余英時『魂兮归来—論仏教流入以前中国靈魂与来世觀念的転変—』(同『東漢生死観』上海・上海古籍出版社、二〇〇五年、原載一九八七年)一七七一―一七五三頁、大形徹、前注(7)『魂のありか—中国古代の靈魂観』、同『中国古代の魂のありか』(諏訪春雄編『東アジアの死者の行方と葬儀 アジア遊学』東京・勉誠出版、二〇〇九年)一二
- (9) 四―一三二頁。
 中国における墓葬の変遷については、張捷夫『中国喪葬史』(台北・文津出版社、一九九五年)、李德喜・郭德維『中国墓葬建築文化』(武漢・湖北教育出版社、二〇〇四年)、劉振東『冥界的秩序—中国古代墓葬制度概観—』(北京・文物出版社、二〇一五年)六五―一六八頁等を参照。上記の劉振東書は、最新の発掘と研究成果にもとづき、東周―魏晋南北朝の中国墓葬制度史の大きな流れを概観する画期的な研究である。隋唐以後の墓制を概観する続刊の刊行が待望される。また、ジェイムズ・ワトソン・エザリン・S・ロウスキ編、西脇常記・神田一世・長尾佳代子訳『中国の死の儀礼』(東京・平凡社、一九九四年、原書 James L. Watson, Evelyn S. Rawski eds, *Death Ritual in late Imperial and Modern China*, Oakland, California: University of California Press, 1988)は、人類学の観点から分析する中国の喪葬儀礼についての重要論文を収録する。中国の喪葬儀礼を東アジアに位置づける諏訪春雄編『東アジアの死者の行方と葬儀(アジア遊学』東京・勉誠出版、二〇〇九年)や、現代中国の喪葬儀礼の実態を多様な角度から分析する愛知大学現代中国学会編『葬送という文化(中国21)』(東京・東方書店、二〇一四年)も参照。
- (10) 中国における火葬の変遷については、宮崎市定『中国火葬考』(同『宮崎市定全集17 中国文明』東京・岩波書店、一九九三年、初出一九六一年)一九八―二二二頁を参照。

西脇常記『唐代の思想と文化』（東京・創文社、二〇〇〇年）第三部第一章唐代の葬俗、一九五―二二四頁は、唐代における火葬の流行を論じる。張建林「有關墓葬考古學研究的思考―以兩漢墓葬為例―」（『西部考古』1、西安・三秦出版社、二〇〇六年）三三二―三四〇頁も、考古遺物から見た仏教や火葬の浸透を論じている。

(11) 新出墓誌の全体像は、新出墓誌の総合目録である高橋継雄編『中国石刻關係図書目録（一九四九―二〇〇七）附『石刻史料新編』（全四輯）書名・著者索引』（東京・汲古書院、二〇〇九年）、同編『中国石刻關係図書目録（二〇〇八―二〇一二前半）稿（明治大学東洋史資料叢刊10）』（東京・明治大学東アジア石刻文物研究所、二〇一三年）を参照。

(12) 楊寬著、西嶋定生監訳、尾形勇・太田有子訳『中国皇帝陵の起源と変遷』（東京・学生社、一九八七年、楊寬『中国古代陵寝制度史研究』（上海・上海人民出版社、二〇〇三年）、劉慶柱・李毓芳著、来村多加史訳『前漢皇帝陵の研究』（東京・学生社、一九九一年、原書『西漢十一陵』西安・陝西人民出版社、一九八七年）。唐代の皇帝陵については、来村多加史『唐代皇帝陵の研究』（東京・学生社、二〇〇一年）と沈睿文『唐陵の布局―空間与秩序―』（北京・北京大学出版社、二〇〇九年）が、実地調査にもとづいて詳細に分析している。また、劉向陽『唐代帝王陵墓』（西安・三秦出版社、二〇〇六年）、王双懷『荒冢残陽―唐代帝陵研究―』（西安・陝西人民教育出版社、二〇〇〇

年）、卜部行弘「山に因りて陵と為す―唐皇帝陵の実態―」（『權原考古学研究所編『大唐皇帝陵（奈良県立權原考古学研究所附属博物館特別展示図録第七三冊）』奈良・奈良県立權原考古学研究所附属博物館、二〇一〇年）一四八―一五四頁も参照。劉向陽『唐乾陵』（西安・三秦出版社、二〇〇三年）と樊英峰・王双懷『線條芸術的遺産―唐乾陵陪葬墓石椁線刻画』（北京・文物出版社、二〇一三年）は、高宗・武則天合葬の乾陵の歴史的特質を叙述する。

(13) 宿白「北魏洛陽城和北邙陵墓―鮮卑遺跡輯録之三―」（『文物』一九七八年第七期）四二―五二頁は、鮮卑族の建国した北魏の洛陽邙山の皇帝陵の形態が、鮮卑族の伝統と中国の古典様式が融合したものであることを指摘し、この融合形態が唐陵にも影響を与えたことを論じる。なお、楊寬著、西嶋定生監訳、尾形勇・太田有子訳、同上注12『中国皇帝陵の起源と変遷』七四―八四頁は、唐陵を、戦国時代以来の中国伝統の陵墓形式の流れの中に位置づけている。

(14) 陝西省考古研究院・唐順陵文物管理所編『唐順陵』（北京・文物出版社、二〇一五年）。

(15) 唐朝において昭陵が担った歴史の意味については、Howard J. Wechsler, *Offerings of Jade and Silk: Ritual and Symbol in the Legitimation of the Tang Dynasty*, New Haven and London: Yale University Press, 1985, pp.142-160。石見清裕「突厥執失氏墓誌と太宗昭陵」（『福井重雅先生古稀・退職記念論集古代東アジアの社会と文化』東京・汲古書院、